

できず、脳生検を行い、cerebral amyloid angiopathyと診断した。

A-9) 頭部外傷後に皮質下出血を反復多発した脳アミロイドアンギオパチーの1例

黒木 亮・板垣 晋一
西沢 英二・北村 洋史 (山形大学 脳神経外科)
中井 晶

脳挫傷後約1年の間に、3カ所4回の皮質下出血を繰り返した脳アミロイドアンギオパチー(CAA)の剖検例を報告した。症例は81才の男性で、高血圧や脳卒中の既往はない。交通事故で頭部外傷を受け、CT上脳挫傷の所見があり左頭頂後頭部皮質下に小出血を認めた。2カ月後と9カ月後、左頭頂後頭部に皮質下出血を呈した。同部位に出血を繰り返したため脳血管撮影を施行したが動脈瘤や血管奇形などの異常は認められなかった。更に2カ月後、左前頭部と右頭頂部皮質下に出血が出現。CAAを疑い、手術で右頭頂皮質を生検したが、アミロイド物質は証明されず。患者はBalint症状などを呈し次第に全身状態が悪化し、肺炎を併発して死亡した。剖検では、アミロイド物質の沈着が大脳皮質動脈壁に認められたが、脳以外の諸臓器には証明されず、CAAと診断した。病理及び剖検所見の報告と共に、CAAと脳出血、および外傷との関連について若干の考察を加えた。

A-10) ヒマラヤでみられた高所網膜出血について

鈴木 尚・角家 暁 (金沢医科大学 脳神経外科)

対象および方法：三国友交登山隊に参加した日本隊員24名中22名を対象に5350mのBase Campで直像鏡を用いて眼底検査を施行、所見の見られた例については眼底カメラで撮影した。結果：22名中5名8眼に網膜出血が認められ、全例視神経乳頭を中心とした火焰状出血であった。黄斑部に出血はなく乳頭にも著変は認められず、視力障害等の自覚症状も呈さなかった。考察：高所網膜出血はhypoxiaに起因するがValsalva manoeuvre等の因子も関与する事が知られている。今回経験した網膜出血は神経線維層の表在性小出血であった。この部へはhypoxiaに対し自己調節機能を有する網膜毛細血管が酸素を供給しているため反応性に拡張する。これに激しい登山活動により一過性の血圧上昇が加わり、また血液粘調度の亢進等もみられ、これらが相互に作用しあって出血を来したものと考えられた。結語：高所でみられた網膜出血例について報告した。

A-11) Sigmoid Sinus Thrombosis の MRI 診断

北篠 敦史・中川原 譲二
武田 利兵衛・和田 啓二
小笠原 俊一・大里 俊明 (中村記念病院 脳神経外科)
鷺見 佳泰・田中 靖通
中村 順一
末松 克美 (財団法人 北海道脳神経疾患研究所)

今回我々はMRIにてsigmoid sinus thrombosisと診断した2症例を経験したので、主にsinus thrombosisの経時的MRI所見とMRI診断の有用性について文献的考察を加え報告する。

症例1：74歳女性。頭痛、吐気、回転性めまい、全身性倦怠感にて発症。第3病日のMRIにてsigmoid sinusに一致してT₁強調画像(SE：500/40)で等信号域、T₂強調画像(SE：2000/80)で高信号域を認めた。脳血管造影及び左内頸静脈造影にて左S状静脈洞閉塞が確認された。

症例2：60歳男性。突然のふらつき感にて発症。CTにて右小脳出血を認めた。第4病日のMRIにてsigmoid sinusに一致してT₁強調画像(IR：2000/44/300)で高信号域、T₂強調画像(SE：2000/80)で等信号域を認めた。脳血管造影では右S状静脈洞は造影されなかった。

A-12) 妊娠初期における静脈洞血栓症の1治療例

柳田 範隆・古和田正悦 (秋田大学 脳神経外科)
米谷 元裕・笹島 浩泰 (雄勝中央病院 脳神経外科)

妊娠初期に発症した静脈洞血栓症は文献上10例にすぎない。最近、妊娠10週で発症した上矢洞血栓症の1治療例を経験したので報告する。症例は39歳の主婦で頭痛、嘔気を訴え来院した。CTで右シルビウス裂の狭小化と皮質増強効果がみられ、両側頸動脈撮影で上矢状洞が造影されず、右前頭・側頭・頭頂部の皮質静脈が螺旋状に蛇行し、さらに右浅側頭静脈が著しく拡張していた。脳血管撮影直後にけいれん重積状態を来し抗けいれん剤でコントロールに努め、更に抗浮腫剤、抗生物質を投薬した。入院2日後のCTで右前頭・側頭・頭頂部に皮質内出血の所見がみられ、抗浮腫剤を増量し経過を観察した。入院8日後には皮質内出血は吸収され、皮質増強効果も認められなかった。同日の脳血管撮影で上矢状洞は閉塞していたが、螺旋状の皮質静脈と拡張した浅側頭静脈は認められず、右Labbe静脈を介して右横静脈洞が造